

『とりかへばや物語』論

——妊娠表現に関して——

庄 健 淳

はじめに

『とりかへばや物語』^①は平安後期の成立とされ、異装をテーマにした物語である。内向的な男君と外向的な女君の異母さ^②ようだが、本来の性とは異なる社会的な性別を付与され、やがてそれぞれ秘密をかかえて出仕し、様々な事件に遭遇しながら、結局は生来の性に戻り、男君は閔白に、女君は中宮にと、それぞれが榮耀栄華を極めるところまでを描く物語である。

この物語については、かつては男女の性交換と女性の生理、性愛に触れる表現があるため、藤岡作太郎によって「その奇変を好むや、殆ど乱に近づき、醜穢読むに堪へざる」^③との酷評を下されていたが、現在は、それが払拭され、この物語を愛情の種々相を描き出すものと見なす見方や、「不自然な性の倒錯それ自体にあるのではなく、架構された倒錯的状况の中における自然な男女の性愛の相こそ描きたかった」^④という見解が定着し、この物語は再

評価されている。

辛島正雄は『とりかへばや物語』が『源氏物語』をはじめとする、「焦点を女の方にしほって、その人生の変転を辿った」(女の物語)であると指摘している。^⑤それを踏まえ、星山健はこの物語が『源氏物語』から『夜の寝覚』への源流を汲み、王朝物語史上の転換点に位置する重要な作品であると評価している。^⑥また、石埜敬子はこの物語の構造を正篇の「不遇時代」と続編の「幸運時代」とに分けて、正篇について、以下のように指摘している。

女君の性の秘密は、四の君と宰相中将、女君と宰相中将という二つの密通事件によって暴露寸前の危機を迎える。同様
に男君の方も春宮との秘密の交わり、宰相中将の強引な求
愛、春宮の懐妊という事態で窮地に追い込まれていくといっ
た具合で、そこに、平行的筋の展開を巡ることができよう。^⑦

つまり、異装の女君と男君をめぐる一連の密通事件とその事件

による妊娠は、女君と男君の異装の秘密を暴露寸前の危機に追い込み、物語の展開に大きな影響を与える鍵なのである。(女の物語)として『とりかへばや物語』を読む時、この物語に登場する女性達に着目すると、妊娠という女性特有の生理現象の存在は看過できない。これまで『とりかへばや物語』の妊娠を正面に取り上げて論じる先行研究はない。

本稿では、『とりかへばや物語』における妊娠の表現を考察する。他の平安物語との比較を通して、その上で物語の核となる異装との関わりについて分析し、妊娠表現の物語の展開における役割を明らかにしたい。

一、平安時代の物語における妊娠の表現について

まず、平安時代において、妊娠がどのような言葉で表現されていたかを確認したい。これについては、中村義雄の指摘がある。中村は、平安時代の文学作品において、妊娠が、「はらむ」と「懐妊」という語によって表現され、和文では「はらむ」、漢文では「懐妊」が多いとの使用傾向があると指摘した。加えて、婉曲表現として、「ただにもおはせず」の表現も使われていると指摘している。^⑨

これを受け、森野宗明は和文における妊娠表現の使用傾向を分析した。その結果、「はらむ」は、「女性の手になる(と考えられている)作品では、『源氏物語』以外でも、その使用に慎重であ

る」と指摘し、特に『栄花物語』においては、「はらむ」の使用が慎重に避けられており、そのかわりに「ただならず」型の婉曲表現をあててのが原則であると述べている。また、「ただならず」型の婉曲表現のほか、他の婉曲表現の存在も指摘した。

こうした婉曲表現としては、同巧の「この五月ばかりより、(中ノ君ガ)、例ならぬさまに、なやましうし給ふこともありけり」(『源氏物語・宿木・四二頁』)の「例ならず」型のほか、より文脈依存度が強く漠然とした「(葵ノ上ハ)心ぐるしきさまの御心地に悩み給ひて、物心細げに思いたり。(光源氏ハソレヲ)めづらしくあはれと思ひ聞え給ひ」(同・葵・三一―九頁)や、「(河陽県ノ后ハ)さんいうより帰り給ひしままに、物などもつゆ見入れ給はぬに、すぎゆく月日かずへて我が御心にあやしと思し知らるることのみあるに」(『松中納言物語・一八二頁』)といった類が散見する。^⑩

これらの先行研究から、平安時代の物語において、「はらむ」よりは「ただならず」型、「例ならず」型のような婉曲表現、またはその他の隴化表現によって表現されていたと言える。

次に、妊娠の義にかかわらず、改めて身体表現として、「ただならず」型と「例ならず」型の表現の意味とその具体的な用方を確認したい。

妊娠そのものは病氣と異なる。しかし、平安時代において、妊娠は病氣と同じく、身体の異常な状態の一つとして捉えられている。従って、「ただならず」と「例ならず」のような、身体状態の普段と異なっている様子を指す表現は、妊娠もしくは病氣を意味している。

平安時代の物語、特に作り物語において、『源氏物語』以前、「ただならず」型の表現は妊娠の意味として使われる用例は数例である。その例として、『うつほ物語』に「女君、夢のごとありしに、ただならずなりにけり」(本稿の引用は、『新編日本古典文学全集』による。傍線と対象の説明は筆者による。以下同様)と俊蔭の娘が若小君との逢瀬の後、妊娠する場面がある。

『源氏物語』には、妊娠を表す用例は紫の上が看病にくる明石中宮に対する諫めの言葉として用いられている、「ただにもおはしまさで、物の怪などいと恐ろしきを、早く参りたまひね」(若菜下)の一例である。

一方、歴史物語である『栄花物語』は、森野宗明が指摘したように、「ただならず」型の表現を以て妊娠を表すのが原則であり、「ただならず」型表現の全七十三例の用例中、六十七例が妊娠を表している。

その他、後期物語においても、「ただならず」型の表現で妊娠を表す用例は、『夜の寢覚』に二例、『狭衣物語』に二例、『浜松中納言物語』に三例見られる。このように、作り物語に限定して言えば、「ただならず」型の表現は決して多用される妊娠表現で

はなかったと言える。

「例ならず」型の表現は「ただならず」と同じく、身体状態の普段と異なっている様子を指すが、「ただならず」が病氣を表す例は『栄花物語』に「殿の御心地のただならぬをぞ、世の大事に思ふめる」の一例だけであることに比べて、「例ならず」は病氣の表現として多用されている。例として、『住吉物語』の「かくて過ぐるほどに、姫君の御乳母、例ならぬ心地して、里へいでにけり」が挙げられる。

ここで特に注目したいのは『源氏物語』における以下の記述である。

A (藤壺) まことに御心地例のやうにもおはしまさぬはいかならむとのみ思し乱る。暑きほどはいとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人々みたてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し。(一一三三二頁)

B (中の君) さるは、この五月ばかりより、例ならぬさまになやましくしたまふこともありけり。こちたく苦しがりなどはしたまはねど、常よりも物まゐることいとどなく、臥してのみおはするを。(五一三八五頁)

C (浮舟) 心地あしくて臥したまへり。(母君)「などか、かく、例ならず、いたく青み瘦せたまへる」と驚きたまふ。(六一一六四頁)

病気が妊娠か判明していない間の身体状態は、「例ならず」型の表現を以てその苦しい様子が描かれている。Aの藤壺とBの中の君のそれは妊娠の事実を示すものだと後からわかるが、Cの浮舟のそれは身体の不調である。つまり、「ただならず」型の表現が妊娠を明示するのと比較して、「例ならず」型の表現はそれははっきり示していない。

平安時代の物語の妊娠表現は、「ただならず」型と「例ならず」型ではほぼ分類できる。「ただならず」型が妊娠そのものを指すことが多いのに対し、「例ならず」型はどちらかという病気の意で用いられていることが多い。特に、『源氏物語』において、あって「例ならず」型を使用して、妊娠の事実を隠蔽する例があることには注目できる。

二、『とりかへばや物語』の妊娠表現について

本節では、『とりかへばや物語』における妊娠を表現する言葉を確認する。まず、この物語に記されている登場人物の妊娠事件を物語における女君の年齢に従って時系列で整理すると、表一のようになる。

次に表一に示した①～⑥の妊娠事件の背景を説明しておきたい。

四の君は右大臣の最愛の末娘である。男装する女君の優れた人柄が右大臣の目に留まり、十六歳の時、女君は右大臣の望みによ

【表一】

女君の年齢	女君	四の君	女一宮
十七歳		▼春、宰相中将と密通 ▼秋、①妊娠発覚 ▼冬、大姫君出産	
十八歳	▼初秋、宰相中将と契る ▼十月、②妊娠発覚	▼女君より遅く、 ③妊娠発覚	
十九歳	▼七月初旬、宇治の若君出産	▼八月頃、姫君出産 ▼入れ替わった後の男君と契る	▼六月、④妊娠発覚 ▼十二月、大若君出産
二十歳	▼正月、帝と契る ▼三月、⑥妊娠発覚 ▼四の君より遅く、皇子出産	▼女君より早く、 ⑤妊娠発覚 ▼九月初旬、若君出産	

つて三歳上の四の君と結婚した。それと同じ時期、女装の男君も尚侍として女一宮（当時は春宮）のもとに出仕し、親しみのあまり、女一宮と密かに契りを交わした。

四の君は女同士の結婚で実のない結婚生活を送っているが、ある春の夜、好色の宰相中将に垣間見られ、強引に契りを結ばれてしまった。その後病氣として寝込んでいるが、それが実は妊娠であると周囲に気付かれ、真相を知らない右大臣は喜んでいる(①)。

年が変わり、残暑厳しい日、男装の女君と語り合っている宰相中将は彼女の姿に惑乱し、近づくことと女であることを知り、彼女と契ってしまった。その後も女君の乳母の家で密会をする。十月より女君は自分の妊娠に気づいた(②)。その時、四の君も再度妊娠した(③)。

翌年、妊娠によって窮地に追い込まれている女君は宰相中将の意に従い、宇治に身を隠すことにした。彼女の失踪の後、女装の男君は彼女を探したために、男装に戻り、旅に出た。その折の心中思惟に初めて女一宮の妊娠が語り出された(④)。

男君の助けで、出産後の女君はうまく宇治から脱出した。きょうだいはお互い身分を交換し、女君は女一宮の出産を助けるために入内した。男君は四の君を訪れ、夫として振舞い、彼女と契った。正月、帝は女君を慕うあまり、彼女の住んでいる宣耀殿に闖入し、思いを遂げた。三月、四の君は男君の子を身籠った(⑤)。女君も帝の御子を妊娠した(⑥)。

全体から言えば、『とりかへばや物語』における妊娠表現は、『ただならぬこと』『例ならぬこと』など、臙化して表現されている場合が多く、決して露骨な表現ではない。むしろ、『源氏物語』

『夜の寝覚』などの平安朝物語文学に通じる表現である。これらの表現を「ただならず」型、「例ならず」型とその他の臙化表現に分類すると、以下のようになる。

「ただならず」型 ③④⑤⑥

「例ならず」型 ①②④

その他の臙化表現 ①②

以上のように、①と②を除けば、『とりかへばや物語』における妊娠は、その過半が「ただならず」型によって表現されているとわかる。

さらに①②⑥に加えて、『とりかへばや物語』における「ただならず」の用例数を確認すると、全十一例の用例のうち、九例が妊娠の意を表している。③④⑤は、用例数からすると、『とりかへばや物語』では、「ただならず」型が主流であると言える。

ところで、全用例中、④だけは見過すことができない。以下、その記述を掲示する。

④春宮(女一宮)を朝夕に見たてまつり馴れてただならぬ御様にやと見ゆるを見捨てたてまつらんかなしさはさらに言はん方なく(三四六頁)

(女一宮)ただならぬ御気色の見えしも(三八七頁)

④の「ただならず」が妊娠を表しており、一見③⑤⑥とかわりないように見える。ただし、注意しなければならぬのは、④の「ただならず」は男君の心中思惟でのみ用いられている点である。④の女一宮の妊娠は当事者である男君だけが察知している。周りの人々は事実を知らず、女一宮は病気だと誤解している。そのときに用いられるのが、のちに掲げる「例ならず」の表現なのである。

このように、「とりかへばや物語」は「ただならず」型と「例ならず」型の表現の使い分けによって、「最初から妊娠とわかるもの」と「病気と間違えられる妊娠」との二種類の妊娠を描き分けているといえる。次節で詳しくその役割を分析する。

三、「とりかへばや物語」の妊娠表現の役割

第一節で引用したように、「源氏物語」における妊娠の記述は「例ならず」型の表現を以て病気と区別し難い描き方をしている。これについて、大森純子は以下のように述べている。

概して、「源氏物語」の懐妊の徴候は、『宇津保物語』や『栄花物語』等で「例のことなし」「例せさせ給ふことなし」といわれるような「月のさはり」の停止という、身体的、生理的現象としてではなく、他のなやみと区別し難い、まぎらわしい心苦しささまの御心地の「なやみ」としてやっ

てくる。そして「うれしさ」よりも、「ゆゆしさ」が強調されさまさまのつつしみの営為へと周りがかきたてられていくのだ。¹⁴⁾

つまり、『源氏物語』で妊娠を描写するとき、それを病気と区別し難い描き方をもって、妊娠に際する当事者の不安の心情を表現しているというのである。

さらに、「夜の寢覚」の妊娠の描写について、宮下雅恵は以下のように指摘している。

（寢覚の上）約十年前の一度目の懐妊・出産の際は、事実を周囲の人々から隠し通すために、最も彼女の身近にいた対の君らが積極的に「もののさとし」とそれによる人々の思いこみを利用して、〈病〉によって〈孕み〉を隠蔽していた。これに対してこの三度目の懐妊では、本人も周囲も男君に見顯わされるまで気づかなかつたという記述になっており、その意味では読者にさえも彼女の懐妊は彼女自身の「物思い」の陰に隠されていた、というのが特質だといえる。つまり、読者にも彼女の懐妊は明示されてはいなかったわけだ。初産時に見られたような〈病〉による〈孕み〉の隠蔽を逆手に取った形で、寢覚の上の〈孕み〉という事実は彼女自身の「物思い」¹⁵⁾という自覚・精神の〈病〉の奥に隠蔽されていたことになる。

『夜の寢覚』における妊娠描写は、病気で妊娠を隠蔽することに役立っている。

ここでは、この『夜の寢覚』の二つの妊娠事件の表現を分析したい。

一回目の妊娠の時、まず地の文で「この三月ばかりは例のやうなることもなく、おのづからとれて見ゆる御乳の気色などを、御方（対の君）は見たてまつり知りたまふ」とあるように、対の君は寢覚の上の身体変化から彼女の妊娠を察知したことを描いている。その後対の君がこの事実を寢覚の上に告げる時の言葉で、「御前の御有様もただにはおはしまさぬなめり」と「ただならず」型の表現でそれを明白に伝えている。

三回目の妊娠の時、寢覚の上の発病の様子を、「かしこには、五月つごもりごろより、御心地例ならず苦しうおほざるれど」と「例ならず」型の表現で語り出されている。その後も「つゆ重湯などやうの物をだに見も入れたまはず」のような悪阻に似る症状が表れているが、「四月ばかりになりたまひにたる御乳の気色など、紛るべくもあらぬさまなるを」とやがてその身体変化で男君が寢覚の上の妊娠を見て取った。

このように、『夜の寢覚』の妊娠表現において、「ただならず」型と「例ならず」型の表現の使い分けがあったことがわかる。「とりかへばや物語」の妊娠表現の使い分けはまさしくその影響をうけたものといえる。

第二節で述べたように、『とりかへばや物語』は妊娠表現の使

い分けによって、二種類の妊娠を描いている。ここで、特に注目したいのは「はじめに」で取り上げた石壁敬子が指摘した物語の進展における重要な鍵である①、②、④の妊娠事件は、「例ならず」型の表現を以て、病気として隠蔽されていることである。続いて、①、②、④のそれぞれの妊娠事件に身体状態に関する「例ならず」型の表現を使う記述に即して、その用法を具体的に分析していく。

まずは①である。四の君は宰相中將の侵入事件による衝撃で寝込んでいた。その次の日に訪れてきた女君に、周りの侍女は四の君が「夜より例ならずおはしまして」（二〇九頁）とその体の不具合を伝えている。その状態が続く、四の君の乳母子である左衛門が宰相中將への手紙の中に、「いと夢のやうなることの後、そのままにいみじく思し入らせたまひて御心地例ならずものしたまへば」（二一〇頁）と再度語られている。やがて、四の君の妊娠が三、四か月になり、お湯殿に伺候する女房が彼女の体の異常に気づいた。そこで、右大臣は四の君に仕える女房に四の君の具合について次のように聞いている。

大臣、「この月ごろ、さしてそこはかとき御心地の、かくのみ例ならぬは、もしあるやうあるにや」とたづね案内したまふに、たしかならぬ限りはさも聞こえざりつるを、御湯などまゐる人々見たてまつりて、「さにおはしけり」と聞こゆれば（二一七頁）

傍線部で示したように、右大臣は、「もしあるやうあるにや」と、四の君のこのような「例ならぬ」状態がもしかしたら妊娠ではないかと聞いている。それに対して、女房は「さにおはしけり」と肯定的な答えをした。それを聞いて、喜んでいる右大臣は四の君に対して、次のように語る。

(右大臣は) いみじくうれしと思したるさまにて寄りたまふて、「いかにぞ。例ならぬ御心地を今まで聞かざりけること。御祈りなどもせさすべきこと」と、泣きに泣きたまふを(一一八頁)

ここで、妊娠だと確認できた四の君の身体状態はなお「例ならぬ」型によって表現されている。

以上見てきたように、四の君の病気が妊娠か、その境界線がはっきりしていない身体状態は、「例ならぬこと」として表現され、やがて病気の誤解が解消され、父右大臣によって妊娠と確認された。真相を知らない右大臣は、この妊娠を「めずらしううれしきこと」(二三三頁)と思っている。しかし、このような病氣として隠し通せなかった妊娠は四の君と宰相中将との密通を顕在化し、彼女と女君との「夫婦」の仲を深く傷つけた。女君にとつて、それは夫として裏切られたことだけでなく、偽装の秘密を暴露する恐れでもある。新編全集の頭注では、「四の君懐妊の慶事は、同時に結婚生活の危機と中納言の秘密露見に通じる悲劇の始

まりでもあった」(二二五頁)と指摘している。まさにその通りである。

続いては②である。宰相中将と密会を重ねた女君は、「十月ばかりより音無しの里に居籠ること止まりて、心地例ならず」(二九二頁)と、「月の障り」が止まり、「例ならぬこと」でそのすぐれない気分を表現している。その後もずっと気分が悪く、「つゆ橘、柑子やうのものも見入れず、つきかへしなどしたまふを」(二九二頁)と、悪阻の症状が出ている。四の君が妊娠していた時の症状を思いだし、「さる人こそかくはあれ」(二九二頁)と自分の妊娠を気取る。しかし、これは決して親に伝えられることではないと思い、十二月の末に左大臣邸を訪れる際、彼女が面痩せているのを心配している父左大臣に対して、「わざと苦しと思ふところもはべらねど、例ならで久しうはべりし名残にや」(二九二頁)と、それが長く続いている「例ならぬ」状態の名残だと答え、病氣の名を以て妊娠の事実を隠し通す。

最後は④である。女君を探し出すために女一宮のもとを離れた男君はすでに女一宮の妊娠に気づいていた。しかし、女一宮のまわりで、その妊娠に気付いたのはただ一人、かの母後の乳母子である宮の宣旨である。きょうだいの帰京後、尚侍(もとは男君、現在は女君)の長期間の不在を「日ごろ例ならず悩みたまふ」(四〇二頁)と病氣で言い繕った時、女一宮の使者からは「宮にも御心地例ならずのみおはしまして」(四〇二頁)と初めてその身体の「例ならぬこと」・不調を語っている。女一宮の出産の助

けとなるため、ようやく女君が出仕すると、宣言は以下のように彼女に事情を打ち明ける。

この月ごろ、うちはへ例ならぬ御気色と見たてまつり嘆きながら、ただかく久しき御里居のおほつかなさなど思ひたまへしほどに、いとあやししく心得ぬさまの御心地と見たてまつり知りはべりて、おぼえなくあさましながら、例させたまふ御ことなどはからひて、御帯のことなどせさせたまてまつりてはべれど(四二二頁)

最初、女一宮の「例ならぬ御気色」が尚侍の不在によるものだと思い、後からそれが実は妊娠であると気付いた宣言は、この秘密を女君と共有することによって、状況の解決を計る。これによって、女一宮の妊娠は、秘密裏に処理することができ、「督の君、宣言と放ちたる人々は、ただ御心地の例ならぬとのみ思ひて」(四三〇頁)とあるように、女君と宣言以外には病氣と認識されることになった。

このように、①、②、④の女性達の「例ならぬ」身体状態は物語にきょうだいの偽装を暴露する危機をもたらししているが、『とりかへばや物語』は「例ならぬこと」の意味の曖昧さを活かし、病氣を以て妊娠を隠し通すかどうかによって、物語を展開させた。

さらに、④の女一宮の妊娠事件について、西本齋子は『とりか

へばや物語』の乳母と乳母子の役割を論じ、次のように指摘している。

最も大きな秘密である偽装は、その結果として新たな秘密を生み出す。その新たな秘密を守るために乳母子が奔走し、その結果、背後にあるもう一つの秘密は隠蔽される。活躍する乳母子は真相を知らない。ここに『今とりかへばや』における最も典型的なパターンがある。私はこれを、秘密保持の構図と考えたいのである。⁽¹⁶⁾

つまり、『とりかへばや物語』における秘密は二重の構図をもっている。④の事件で、病氣を以て成功に隠したのが、女一宮の妊娠の秘密だけではなく、その背後にある最も大きな秘密であるきょうだいの偽装と交換でもある。これも妊娠表現が『とりかへばや物語』の進展に働いた重要な役割といえる。

おわりに

以上、『とりかへばや物語』における妊娠を表現する言葉に着目し、その特徴と役割を考察した。『とりかへばや物語』における妊娠表現は、「ただならぬこと」「例ならぬこと」など、臆化して表現されている場合が多く、決して露骨な表現ではない。むしろ、『源氏物語』『夜の寝覚』などの平安朝物語文学に通じる表現

である。さらに、この物語における「ただならず」型と「例ならず」型の表現の使い分けは「源氏物語」「夜の寢覚」の流れから表れるものであることを示した。また、異装をテーマとした物語である「とりかへばや物語」の特色として、妊娠表現の使い分けは物語を展開させ、妊娠の秘密を隠蔽するだけでなく、この物語最大な秘密である偽装を隠蔽する役割をも果たしていたと指摘した。今後の課題としては、「とりかへばや物語」における病気にかわる描写をも視野に入れ、妊娠の描写と併せて総合的に考察していく必要があるだろう。

注

- (1) 『とりかへばや物語』は古本と今本とがあるが、現存するものが今本である。本稿はそれを考察対象にする。
- (2) 男君と女君はどちらが年上かはつきりしていないため、本稿は「きょうだい」で表記する。
- (3) 藤岡作太郎『国文学史 平安朝篇』（一九〇五年 東京開成館、「東洋文庫」一九七一年 平凡社）
- (4) 鈴木弘道『平安末期物語論』（一九六八年 塙書房）
- (5) 今井源衛『「とりかへばや物語」総説』（鑑賞 日本古典文学）一九七六年 角川書店）
- (6) 辛島正雄『「今とりかへばや」の定位』（堤中納言物語 とりかへばや物語）一九九二年 岩波書店）
- (7) 星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』——「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉——」（『王朝物語史論…引用の「源氏物語」二〇〇八年 笠間書院、初出…『国語と国文学』八三—四 二〇〇六年四月）
- (8) 石埜敬子「とりかへばや物語の構造」（『跡見学園短期大学紀要』二二—一九七六年三月）
- (9) 中村義雄『王朝の風俗と文学』（一九六二年 塙書房）第一章 生誕前後と幼年期」「三 懐妊と着帯」
- (10) 森野宗明『王朝貴族社会の女性と言語』（一九七五年 精堂）〔補説〕「懐妊を意味する表現」
- (11) 前掲注(10) 森野氏の論文に参照。森野氏の本文引用は『日本古典文学大系』による。
- (12) 妊娠の意のほか、病気を表す「ただならぬ」一例、普通でない意を表す「ただならず」三例と「ただにもあらず」一例、「心の穏やかならぬさま」を表す「ただならず」一例がある。
- (13) そのうち「ただならず」六例、「ただならぬ」一例、「ただならぬ」四例。妊娠以外の意を表すものは、「なみなみならぬ」意を表す「ただならず」一例と「心の穏やかならぬさま」を表す「ただならぬ」一例である。
- (14) 大森純子「源氏物語・孕みの時間—懐妊、出産の言説をめぐって—」（『日本文学』四四—六 一九九五年六月）
- (15) 宮下雅恵「病と孕み、隠蔽と疎外——『夜の寢覚』を手掛かりに——」（『夜の寢覚論…「奉仕」する源氏物語』二〇一

一年 青簡舎、初出…『日本文学』五〇―五 二〇〇一年
五月)

(16) 西本寮子「秘密保持の構図―『今とりかへばや』の乳母
と乳母子たち―」(『広島女子大学文学部紀要』二四 一九
八九年一月)

(しょう・しょうじゅん 本学博士後期課程)

